

出藍文庫

2-1

社会人百合短編集

近藤 貴弥 著



出藍文庫



# 目次

エチユードを弾くために.....	五
残り430 ml.....	二九
木曜日の使い方.....	五五
理由を答えよ.....	七九
後書き.....	一〇二



エチュードを弾くために

東京・赤坂に位置する丸岡病院は、病院と呼ぶには明るく、広く、静かだった。高い天井は他の病院と同じように白いが、廊下やロビーは他の病院と違い木目調のブラウンで統一されている。広い家に来てしまったと勘違いさせるのは、きつと、ロビーの真ん中に置かれていたグランドピアノのせいだろう。

ピアノ調律師として働く安井は今回の依頼を受けると決めた時から、独立してからは着ないだろうと思っていたグレーのパンツスーツを選んだ。間違つた選択ではなかったと自らを鼓舞する。それでも、自分がこの病院に足を運んでいることの違和感を拭えない。どこか自分の身体が悪ければ病院を訪れるのは当然だが、今日はそういう事情ではない。きつとこの違和感は、久し振りに会う昔の友達が医師として働いているからだろう。そう思うことにした。低いヒールを鳴らして、受付で院長からピアノの依頼を受けて伺つた旨を伝えると、応接室へと案内される。

応接室も明るく広い。中央にソファとテーブルがセットで置かれ、壁には何枚もの絵画が飾つてある。安井はここへ通されても、病院というよりも、広く明るい家のピアノの調律に

## 7 エチュードを弾くために

来たという感覚が強かった。

ドアをノックされ、依頼者が姿を見せた。テレビで度々見かけた白衣ではない依頼者が。ライトブルーのスカートスーツに身を包むその姿は、やはりここが病院であることに違和感を覚える。ダークブラウンの髪をショートカットにした色が白い顔。眼鏡越しに安井を見たかと思えば、無愛想に近しい声で問う。

「……痩せた？」

安井の遠い記憶の中に眠っていた丸岡も、いつもこんな調子だった。体温すら低そうな、無遠慮な声音。冷ややかなで凜とした声。

丸岡は答えを待つことなく、安井の前へと座る。

安井はどう答えようかと迷ったのを誤魔化すように茶を口に含む。すると丸岡の一言も胸の内に落ちてきて、段々と頬に苦笑が広がってくる。その一言は、どういう心境から発せられたものなのだろうか。医者としての立場か、それとも友達と何十年振りに再会した感想か。

「いつと比べてるんですか？」

「二十二年前」

安井が探りを入れると、丸岡は随分と昔のことを思い出していたらしい。

安井の口調はその時分に合わせたように砕けた調子になった。しかし、二十年という歳月は二人をそれほど昔のように戻さなかった。

「そんな昔のこと、よく覚えてるわね」

最後に会ったのは、高校の卒業式だっただろうか。安井ははつきりと覚えていないが、丸岡が具体的な年数で答えているのならば、あの日以来なのだろう。

安井にとつてしてみれば、丸岡と別の道を歩んでからの日々は辛く、苦しい連続の始まりだった。安井はピアノを続けるためにも音大へと進学し、丸岡はピアノを辞めて医科大へと進学した。

安井は記憶に蓋をするように、仕事の話の口にする。

「それで、依頼とは？」

丸岡は持っていた書類を安井の方へと滑らせる。



## 9 エチュードを弾くために

「あなたも見たと思うし、メールでも書いたと思うけど、ロビーにあるピアノを修理してほしいのよ」

「どんなふうにですか？」

「正しく音が鳴れば、それで良いわ」

安井に渡された書類も丸岡に返答も、どちらも事前にメールで確認していたものと大差はない。すぐに修理に取り掛かることもできるし、すぐに終わる作業だった。しかし、安井は席を立つことなく、書類に書かれているピアノの情報を睨むように見て、メールの文面も思い出していった。

ベーゼンドルファー・インペリアル。至福の音色を奏でるグランドピアノ。修理したことは独立する前にある。音が整っているか確認した程度で演奏したことはないが。

普通のピアノと比べて鍵盤の数が多く、端の鍵盤が黒く塗られた外観。柔らかな木を思わせる音色。ピアニストならば、一度は弾いてみたいと思うもの。同時にピアニスト泣かせでもあるもの。

そんな高価なピアノが病院にある。寄贈されたということは文書で教えてもらったが、安井に依頼された理由が分からない。

丸岡が、昔の縁や友情などというものを大切に作る人間ではないだろう。冷たい声が常なのだから。体温も低く、情にも薄い。あれほど打ち込んだピアノを高校卒業と同時に辞めた。して働く家庭に生まれた宿命よ、と言った時から、そういう運命だったらしい。両親共に医者として働いた薄い女であるが、昔を懐かしむ感覚は持っている。

となれば、一つ訊くことがあれば、二つ、三つと続くことは目に見えている。別々の大学を歩んだ日々の話まで戻るのには明らかだった。

安井の視線はいつの間にか何か答えを求めするように丸岡の唇へと移っていた。派手ではない落ち着いた色合いの唇へと。

丸岡は口元に注がれた視線を振り払うようにそつと指を添える。

「製造元とか販売会社に連絡しても良かったんだけど、あなたが独立したって聞いたから」

11 エチュードを弾くために

「独立したのは随分前よ」

「前であろうとなかろうと、仕事はあつた方が良いでしょう？」

「それで、私に？」

何かを言いたげな安井に、丸岡は一層冷たい声で応じる。

「そうよ、何、不満？」

「不満じゃないけど……」

「そう？ その割には、何か聞き足りないことがあるつて声じゃない。それとも、何、調律師を変えてもいいつていう言葉は嘘なのかしら？」

「それは本当よ」

「じゃ、何が不満つてわけ？」

丸岡は形の良い眉を釣り上げ、矢継ぎ早に問う。自分の思い通りに事が進んでいない時の調子。安井は怯えることなく、口元に浮かび上がってきた得意げな微笑みを隠すように湯呑みを運ぶ。

昔、よく聞いた声。分からない時に、かっとなるそれ。

丸岡と安井は、音楽教室で知り合った。安井の家にはピアノがあり、両親から教わることもあった。ピアノを弾く安井に人とは違う何かしらの才能を感じ取った時、親と娘という関係は確実に崩れた。人より物覚えが良かったり、耳が良かったり、身体が大きかったり、指が長かったり……。そういう可能性が、両親を別の何かに変えてしまった。

両親が安井の才能に気づいて教室に通わせてから、安井も自らのピアノの才能にようやく気づいた。というよりも、上手にピアノを弾く丸岡のお陰で気づかされた。丸岡にはできないことが、安井の指と頭には可能だった。

譜面を正確に追いかけて、機械のように弾くことは誰にも負けない。コンクールで優秀な成績を残すのは、いつも安井だった。

だから、丸岡は安井の前では二番目の女だった。二番目の奏者。

それでも高校を卒業するまで丸岡はピアノを続けたのは、素直に凄いと思っっている。高校までピアノを続けたのは、自分が安井より上手くないことを受け入れるのに要した時間、と

13 エチュードを弾くために

言い換えても良いのかもしれない。そう思っていたのは安井だけで、丸岡にとってピアノは高校を卒業するまでに続ける趣味の一つでしかなかったが。

安井は過去を懐かしむのをやめ、本題へと戻る。

丸岡も昔はピアノを弾いていた身であれば、ロビーに置かれているピアノが普通とは違うことは知っているだろう。そういうピアノを、ただ正確な音が出せるだけでいい、と調律してしまうのはどうなのだろうか。

長いようで短かった沈黙を、安井は毅然とした調子で破った。

「飾っておくだけじゃもつたないわ」

丸岡はそんなことを心配していたのか、と言いたげに笑って言う。

「クリスマスとか活躍するわよ」

「他には？」

「それくらい」

「あなたは弾かないの？」

安井が問い掛けると、眼鏡の奥の瞳が微かに揺れた。

「弾けるでしょ」

もし丸岡がまだピアノを弾いているのなら、丸岡の指に合うように調律しようと思っていた。そんな期待を有していた。高校を卒業してから一度もピアノを弾いていないような彼女を前にして。

丸岡は体温の低い、冷たい声で言い切った。声と何一つ変わらない冷たい表情。

「私は忙しいのよ」

予想していた返答に安井は零れそうになったため息を、ぐつと呑み込みんだ。

そうやって弾かれなくなったピアノを、安井は何台も見ている。調律師としての立場上、修理できるピアノがあることは良いことだが、ピアノを弾き続けた人間として思うところはあ

る。このロビーにあるピアノは独特な構造をしており、本来の音色を奏するためには定期的

に弾く必要がある。週に一度、一年以上かけてメンテナンスを続けければ、本来の柔らかく深

い音色が奏でられるかもしれない。それに湿度や温度に弱い。病院という環境上、一定に保たれているかもしれないが。

このロビーに置かれているピアノは、そういうピアノなのだ。それが一年に一度程度しか弾かれないのは、一人の奏者として頭痛を覚える。

いつの間にか眉間に寄っていた皺を指でさすり、安井は改めてロビーのピアノについて説明した。丸岡は過去に何度か説明を受けて聞き飽きたように適当に相槌を打つ。安井の説明を聞き終えると、丸岡は、だったら、と前置きして、

「あなたが定期的に弾きに来てちょうだい。それで解決。修理の一環。あなたの好きなようにやっていいわよ。あなたが一番弾くんだから」

と、安井の都合を考えていない一言でまとめた。安井は何か言うよりも早く、一週間のスケジュールを思い返したが、ピアノを弾くのを断るのに便利な予定はない。一年継続した仕事が依頼されるのは有り難い。しかし、釈然としない。

「調律師の中には、ピアノが弾けない人だっているのよ」

そんな弁明が意味をなさないことは、安井自身がよく知っていた。

ピアノを修理するのとピアノを弾く能力は違う。音の違いが分かればいい調律師と譜面を追いかけて曲を奏でる奏者は違う。機械のように譜面を追いかけ、優等生のようにピアノを弾くのと、芸術的に弾くのとでは違う。ピアノリストに求められるそんな芸術的な演奏だ。

もし安井がそういうふうにはピアノが弾けるのなら、こういう職に就かなかつただろうし、ピアノ科から調律科に転科しなかつただろうし、もしかすれば大学院に進学し、一層ピアノに打ち込んだかもしれない。しかし、そういうことを、丸岡は知らない。きつと、ずっと昔の、自分より唯一ピアノが上手い安井のままかもしれない。

丸岡は安井の説明を受けても、だから何と言いたげに

「何人か見たわ」

と淡々とした調子で片付ける。その冷たげな目が、わずかに火が灯つたと感じさせたのは安井の見間違いではないだろう。でもあなたは違うでしょう、と語る瞳。苦渋を舐めさせられ続けたかつての日々を復讐するような熱。



安井は多くの過去を思い出しながら、疲れ切ったように溜め息を吐いた。最悪、という言葉も零れた。丸岡は安井の言葉が聞こえなかったように綺麗な笑顔を浮かべて、言う。

「久し振りね、あなたのピアノを聞くのは」

※

広いロビーの真ん中。安井はかつて何度もそうしたようにピアノの前に座る。安井は鍵盤の蓋を開けながら、ロビーに並ぶ椅子の最前列に座る丸岡に怪訝な視線を送る。

「……忙しいんじゃないの？」

「空けてあるの」

どうしてとか何時までとかいう疑問は安井の口から零れることはなく、そ、という極々短い音が零れた。丸岡は安井の指が鍵盤から動く気配がないことに勘づいたのか、意外ね、と呟き、そつと提案される。

「後ろ向いた方が良い？」

「見えていいわよ」

「その割には手が動いてないようだけれど？ 見られていると仕事ができないタイプになった？ 顔色一つ変えずにコンクールで弾けるのにな？」

怒らないでいいじゃないと伝えたところで、怒ってないわよ、と言いつ返されるだけだろう。安井は指先で撫でるように鍵盤に触れ、丸岡の感情を落ち着かせようとする。

「……考えることが多いだけよ」

「音を確認する前から？」

「そうよ」

安井は簡素に答えて、丸岡に背中を押されたのかピアノの音を確認する。慣れた手つきで一通りの音色を確認する。音程に変化は見られないが、全体的に固く歪んだ音を発せられるのが分かる。痩せた不自然な響きが、ロビーを滑る。中高音の響きに普段調律するピアノとの違いを覚えるのは、このピアノが低い音を奏でるのに秀でていからだろうか。

タッチも悪くないように思えるが、極々僅かな遅れを、安井の指先と耳は感じ取っていた。安井は丸岡を気にかけることなく、弦の張りを調整し、音を整えていく。ネジの調整をし、タッチも整える。そういう作業を繰り返していく最中、安井は手を止め、念の押すように丸岡に訊く。

「本当に私の好きなようにしていいのね？」

「言つたでしょう？ あなたが一番弾くんだから。あなたがやりやすいようにしていいわ」  
安井は丸岡に答える代わりに、数音鳴らしてみた。音の歪みは整えられ、丸い響きが蘇る。タッチの違和感もない。ピアノ調律師としての仕事は終えたように思うのだが、このピアノには奏者という決定的に欠けているものがある。

丸岡は安井の好きなように調整すればいいと言うが、安井は奏者として致命的なものを有していない。

安井の演奏するピアノには、個性というものがない。安井のピアノは水のように流れるばかりで、聞き手の心には何も残らないピアノだった。表現力がない、と言われたのは音大の

先生だったか、同じように課題曲を弾いていた友達だったか。

安井の演奏するピアノは確かに上手いものであった。ピアノ科に在籍している間も、安井のピアノの上手さは評価に値した。しかし、それだけ。

安井の演奏は無色透明で形のない、聞き手が演奏を味わおうとすれば途端に形を失う、あまりに脆い。

上手にピアノは弾けるが、人に聞かせる値しない演奏。

それが、安井がピアノ科に在籍している間に得た自らの演奏の結論だった。

安井よりも個人的で芸術的で、上手い奏者は、安井の周りに多くいる。音大というのは、そういう場所だった。

音大を中退することも考えたが、安井の人生とピアノはもう切っても切れない関係にあった。両親の猛反対を受けたのも大きかった。何のためにピアノを続けさせたのか分からない。何のために音大に進学させたのか分からない、と。

安井には、ピアノしかなかった。

奏者としてピアノを弾くことはなくても、ピアノを修理し調整する者がおり、奏者のために必要不可欠と周りに諭され、安井は転科に留まった。

つまり安井は、奏者ではない。

しかし丸岡はそんな安井の事情など知らない。話す暇など、二人の間にはなかった。

病院という場に置いてあるのだから、誰でも弾きやすいように調整しようと思っていた。そういうふう調整しても丸岡はきつと気づかないだろう。これから予定されている週一回のメンテナンスもそういうピアノを弾くだけ。それで良い。それが良い。

そう思っている一方で、それではいけないと思っている安井自身がいる。安井は湧き上がっている身勝手なような自意識を押し殺して、ピアノの調律を終えた。

安井はもう、ピアノを弾かない。そう決めて、この道を歩んだ。

安井は、鍵盤の蓋を閉じた。

「終わったの？」

「ええ、後は毎週来て弾いてあげるわ」

「何か弾いてくれないの？」

二十二年振りの再会は、丸岡を昔に戻したようだった。ひんやりとした声は、自分より上手い演奏を耳にして何かを得ようとしている女子高生時分のそれだった。あの時の丸井は岡の頼みを断ることなく、弾いた。全然違ふのね、と怒りを滲ませることもあれば、堪えるように口元だけを強張らせる彼女を見ていたかったから。

今の安井は、もうそれほどまでに幼くなかった。

「来週のリクエスト？」

「今よ。試しに弾いてくれない？ いるわよ、弾いてくれる人」

「そういうサービスはやってないの」

突き放すような言葉だと、安井自身も感じた。丸岡の冷めたような眼差しが凜と揺れた。

何故、どうして、本当にやめたのか、と訊かないのは丸岡の優しさであろうか。あるいは、動揺の渦中でそういう言葉を紡ぐ余裕すらないのか。白い眉間にはしわ一つ寄らない。怒っているわけではないらしい。

二人の間にどこか張り詰めた沈黙が満ちる。丸岡は何か言葉を探しているのか、目を閉じ、高い天井を仰ぐ。

柔らかな照明が降り注ぐ病院は、やはり広く、明るい。時の流れを曖昧に思わせるほどに。安井は、丸岡に時間は大丈夫なのか、と訊くような真似はしなかった。また来週に会いましょう、と言うこともなかった。

丸岡が気持ちの整理ができるのを待った。彼女がそういう切り替えが早いことを知っていたから。

丸岡の思い描いた安井像は、きつと最後に違う道歩み始めた時と変わっていない。安井の思い描く丸岡も、その時と変わっていない。しかし、丸岡は丸岡だった。

ピアノをやめて、医学部に合格し、医師として働く。思っていた通りの人生を歩んでいる彼女。

だから、丸岡が次の言葉を発するまでかかる時間が短いことは知っていた。

丸岡の顔は、まだ天井を仰いでいて、見えない。

「酷い依頼だと思おう？」

冷たい声が降ってくる。

安井は閉じた蓋を見つめ、微笑するように答えた。

「思わないわ」

丸岡の視線が天井から安井の顔へと移る。眼鏡の奥の瞳は、かつて安井がピアノをやめると丸岡に聞かれた時と同じような困惑な調子で色づいている。

「……私、あなたはピアノを弾き続けると思っていたの」

その言葉も、安井が丸岡に向けた言葉だった。だから安井の返事も、丸岡が常としている体温の低い、無愛想な冷たいものになった。

「毎年、やめる人はいるじゃない。今回は、私とその一人になっただけよ」

安井が激昂した時のように丸岡も感情的になると思った。そんな理由でやめなくてもいいじゃない、と叫んだ昔の安井のように。

「お疲れ様、過酷な世界にいたのね」



丸岡の品の良い唇から零れた言葉は、同情に濡れていた。迷いを一切感じさせない言葉。患者に何か説明する時も、こんなふうに話すのだろうと想像がつく。

眼鏡の向こうに輝く瞳からは困惑の色が消えていて、憐れむような色を帯びている。

安井は言葉に詰まった。否定する言葉も、昔のことよと自嘲できたはずなのだが、安井は何も言い返すことなく、丸岡を見つめる。目頭が熱くなる。

安井がそういう言葉をかけてほしかった時、安井の周りはピアノを続けることを強いた。あるいは、安井の空いた席を喜んだ。環境を変えざるを得なかった安井は新しいことを覚えることに精一杯で、自らを労う余裕はなかった。

そうやって、今の今まで生きてきた。ピアノを弾くことをやめた、と思えないまま。

丸岡のように、きっぱりと決別できたわけではない。丸岡のように決別できれば、真新しい気持ちでピアノに向き合える時があつたのかもしれない。しかし、安井はそういう状況になかった。

今になってはじめて労いの言葉をかけられ、ようやくピアノをやめたのだと実感した。

「あなたほど過酷じゃなかった……」

安井の強がりのような反抗は、

「比べる必要はないのよ、そんな別世界のこと」

優しい言葉でまとめられた。

それから短い沈黙があり、そろそろ仕事に戻るわ、と丸岡は呟き、立ち上がる。丸岡の靴音が遠くなる。立ち止まったかと思えば、するりとした冷たい声で来週のことを話す。

「弾きたかったら弾きに來て。息抜きでもいいから」

仕事として依頼されたのだから安井は来週もここに来る予定だった。そうして何か、丸岡からリクエストされた曲を弾く予定だった。

が、そういう答えを求められているわけではないことは分かる。去っていく背中を呼び止めるように、安井は訊く。

「あなたも弾く？ 息抜きに」

足音は止まり、返事が返ってくる。

「エチュードからでも良かったら弾くわ」

「良いわよ、エチュードで。弾いて安定させないといけないから」

嘘でしょ、という動揺した言葉は随分と遠いところから聞こえてきた。

翌週、安井は再び、丸岡病院に足を運んだ。先週調律したピアノが安定した音色にさせるためには、定期的に弾く必要があったから。嫌な気持ちはなかった。受付で用件を話すと、ロビーの中心にあるピアノへ向かう。

見知った顔が、不思議と不機嫌そうな表情を露わにして、ピアノの前にいる。白衣を畳んで椅子に置き、先週とはまた色の違う明るいグレーのスカートスーツを着た女医。安井は丸岡の眉間に刻まれたしわに気づいていないような調子で問う。

「忙しくないの？」

丸岡は眼鏡を外し、眉間のしわを揉みながら答える。夏に聞けば心地良いであろう体温の低さを感じられる冷たい声。

「忙しいわよ。でも、だからといって断るのは違うでしょ」

「真面目なのね」

「あなたこそ、急な依頼が入ったからって断っても良かったのよ」

「ダブルブックキングはしないわ」

そんなこと話しながら、安井はピアノの前に座る。すぐに抗議の声が飛んでくる。

「ちよつと、あなたから弾くの？」

「ええ、調律師として最初に弾かないと分からないでしょう？」

安井はそれ以上、丸岡の抗議を受け付けないと言いたげに、鍵盤の蓋を開け、エチュードを弾き始めた。〈了〉

残り  
430  
ml

コーヒーを家でも淹れるようになったのは、一人暮らしをするようになってから。

大学生の頃からはじめて、社会人として働くようになってこのＩＬＤＫに引越してからも続いている習慣の一つ。ミルクやシュガーを入れない。そういうコーヒーは好きじゃないから。いつも、ブラックコーヒー。

習慣の一つだけど、社会人になると大学の頃のような余裕ある朝を迎えることは難しく、寢室から急いで出て、インスタントのスティックタイプを飲んだり、ドリップバッグで飲んだりする。

でも休みの日は、ちゃんと余裕のある朝を意識する。有給を取った今日などは特に。

仕事に行く時のアラームよりも早い時間にセットしたアラームで起きる。二度寝の誘惑に負けないようにカーテンを開けると、南向きの窓からは晴れ渡った日差しが射しこんでくる。情けない声を漏らしながらも、休日が無駄にしないために寢室を出る。

のんびりとシャワーを浴びて、今日淹れるコーヒー豆を何にするか、粗く挽くか細かく挽くか考えながら、髪を乾かして、部屋着へと着替る。

手動のミルで豆を挽く音やお湯が沸く音がリビングへと広がる。

休日の朝からしつかり動きたいので、苦味が感じられるように細挽き。苦味が強いとコーヒーを飲んでいるって感じがする。

使う器具全部にお湯を注いで、温める。サーバーのお湯を捨てて、ドリッパーにヘーパーフィルターをセット。一つ一つ準備を進めることは慣れ親しんだ行為だけど、私の休日がどうなるかはここから始まるといっても過言ではない。少しずつ頭を覚醒させる。

最初に蒸す時にだけ使うアワーグラスをひっくり返して、三〇秒を測る。ポタポタと抽出されるコーヒーをスツールに座って眺めている時、休日の貴重な一時を味わっていると思う。リビングに慣れ親しんだ香りが満ちる。

普段だったら、シャワーを浴びてメイクをして、朝ご飯とお昼ご飯のお弁当を用意して、と時間に追われ続けるのに。部屋着ですっぴんで眼鏡という休日にはしか許されない恰好でも何も焦る必要はない。今、私の休日の主導権は私が握っている。

私の休日は常にブラックコーヒーから始まる。

ただ一杯分のコーヒーを用意するのは、ちょっとコツが必要で、完全に起きていない頭で用意すると一杯より多い量がコーヒーサーバーへと抽出されることが度々ある。今のようになら、マグカップに注いでも、余るぐらい。

冷蔵庫で冷やして、お昼ご飯の後で氷をたっぷり加えたアイスコーヒーにしようかと思える。でも、このコーヒーはアイス用じゃないから、味が薄くなってしまう。どうしようかと思えながら、シューズボックスの上に飾っていた黄色いダリアの水を入れ替える。

ダリアの花瓶を元の位置に戻した時、インターホンが鳴る。こんな朝早くに来客なんて非常識だ。居留守を使っても良かったかもしれないけど、居留守を使うにはあまりにドアと近くて、そのまま流れるような動作でドアスコープを覗く。

え、という声が零れたかもしれない。

スコープの向こうにいるスーツ姿の女の人は、私のそんな微かな驚きに反応したように顔を上げる。長い黒髪が揺れる。

私がただメイクをしても近づけない整った顔立ち。目鼻立ちが鮮やかというより、目



力が強い。長い黒髪で輪郭や眉あたりを隠しても、分かる。というか、隠していると余計際立つ。

ベージュのトレンチコートを肩に引つ掛け、トートバッグとコンビニの袋を持つすらりとした立ち姿。姿勢が良く、ヒールなんて履かなくても十分背が高く見える。鋭角な女性。はじめてこの人に会った時、ギリシャの石像を思い浮かんだことを思い出す。

待たせるのも悪くてドアを開けて、冷静を努めて声をかける。リビングに満ちていたコーヒーの香りが、外に流れたような気がした。

「お久しぶり……です？」

そういうふうにあ挨拶するのが正しいか分からなかったけど、私とこの人の間には、おはようございます、と言うよりも適切だと思った。事実、久し振りだった。社会人として働く直前に、この家への引越しを手伝ってくれた時以来のような気がする。

でも、女の人はその数年の隔たりを感じさせない。まるで、昨日も会っていたように言う。

「コーヒーあるんでしょう？」

早朝に聞くと心ばかりかしんどさを覚える活き活きとした声。女の人は手に持っていたコンビニの袋を私の胸へ押し付けけるように渡す。中身は牛乳だった。

え、あの、と当惑する私を他所にズカズカと上がってくる。高いヒールを鳴らして。ヒールが鳴らなくなつたと思えば、靴を脱ごうとしている。

私は彼女の前に回り込んで、コンビニの袋を持ったまま瞬く間に両手を広げ、しっかりと残っている戸惑いを明らかにするように無言で制する。待つてください、という言葉は言葉にならなかった。

女の人は何も言わずに私の両手の手の平を見ろした。かと思えば、高い背を一層高くするように背伸びをして、右奥に広がるキッチンに視線を移す。一人分のコーヒーが入ったマグカップと行き場をなくしたようにサーバーに残っているコーヒー。

「あるじゃない」

女の人は満足そうに微笑する。それから私の制止を無視するように赤いハイヒールを脱いで、そつとフロアリングを歩く。

赤いハイヒールは、ブラウンやブラックの靴しか並んでいない玄関で強い存在感を放っている。私の家の玄関なのに、まるで他の人の家にながってしまったような不思議な感覚。

私とこの人は同じ大学の出身で、私の二つ上のこの人は長野さん。私が大学に入学した頃、長野さんは僅かな単位と卒論と就活だけで良かったらしい。だから長野さんは、私達一年生に多くのことを教えた。勉強以外のことを。カフェのこと、美味しいコーヒーのこと、小説や映画や絵画のこと、誰かを好きになるということ……。

そういう昔のことを思い出していると先輩に流れそうになるので、私は彼女の背中を追いかける。近くにあるの思っていた背中は、もう随分と遠いところにあった。

「あの！」

思ったより大きな声がかが響いた。

長野さんはいつの間にか持っていたトートバックをリビングのローテーブルへと置き、その上に引っ掛けていたトレンチコートを畳む。

そうするのが当然のような足取りで、さっきまで私が座っていたスツールに腰を下ろした。

さらっと足を組んで、私を見上げる。

「どうしたの……？」

訊き返され、私はどういふことを答えればいいのか分からなくなった。

棚にしまつてるマグカップを取れば、もうサーバーの残つているコーヒーを注ぐだけで、コーヒーを用意はできる。それなのに、長野さんは私が用意するのを待っている。

長野さんは私が持っている牛乳に視線を落として、忘れていたかのように付け加える。まるで、私が声を上げた理由がその牛乳を扱いに困っているとようやく気づいたように。

「あ、ミルクは熱くしてね」

私はコーヒーはブラックで飲むと決めている。酸味や苦味が気持ちを切り替えるのに役立つから。スイッチみたいなものだ。

それに私は牛乳を好んで飲まない。料理で必要なこともあるかもしれないけど、そもそも選択肢に入れないぐらいだ。小学校の時に白ご飯と一緒に紙パックの牛乳が出てきて、それからずっと嫌いだ。

でも、長野さんは必ずコーヒーに牛乳を入れるし、シュガーやメイプルを入れることだつてある。甘いものを好む。

胃を守るためだとか言っていたと思うけど、私からしたら信じられない。そんなに身体のことを気遣うなら飲む量を減らしたら良いじゃないですか、つて言ったら、だからエスプレッソにしているじゃないつて反論のような何かをされた。

この人はいつだつて、自分のペースを守れて、人を巻き込むことに長けている。何だかそうしないと私が悪いみたいに思わせるのも上手だ。

私は自分の家なのに居場所を奪われたようにキッチンに立つ。自分のマグカップに注いだコーヒーに口を付けて、せめてもの反抗をする。

「ブラックなんですけど」

「買ってきたじゃない」

それで良いでしょ？と付け加えられ、私は仕方なしに少量の牛乳を片手鍋に入れて、火にかける。

隣から気遣うような提案をされる。

「ミルクパン便利よ。買ったたら？」

「私はどつかの誰かさんみたいに散財する趣味はありません」

他にも色々と言いたいことはあるけど、コーヒーを用意できないほどのことじゃない。この人と会った時点で、もうペースに巻き込まれることは避けられない。苛々するより巻き込まれた方がストレスは少ない。

色々喋って長居されたら困る。……長居しないと思うけど。多分、仕事あるだろうし。私の家には、コーヒー豆はもちろんのこと、スティックのインスタントコーヒーもあればドリップバッグもあり、友達や職場の人からお土産としてコーヒーを頂くことがある。つまり、私のキッチンには私でも把握していないようなコーヒーが眠っているのだ。

身を屈めて戸棚を探していると、牛乳はすぐに音を立てる。

目当てのドリップバッグを見つけて、すぐに火を止めようと思っていたら、長野さんが火を止めてくれた。

お札を言うと、長野さんはサーバーに残っているコーヒーを指す。

「それで良いわよ？ ホットミルクと合うコーヒーを淹れてくれなくても」

「長野さんの胃が荒れないか心配なので、それ用のをちゃんと用意してるんですよ」

……自分の発言に違和感を覚えたけど、まあいい。これは私から先輩への復讐だ。長野さんは私の復讐に気づかず楽しんで笑う。

「よくそんなこと覚えるわね、感心感心」

用意しようとしているドリップバッグは友達からの頂き物だった。珍しそうなのであげるわ、と言われた記憶がある。

そのコーヒーはお茶の葉がミックスしてあった。口の中に含むとコーヒーの味わいを覚えるのだが、鼻に抜ける感覚はお茶のそれだった。

だから私は一回だけ飲んで、好きになれず、飲まずに棚にしまっていた。

胃を守るために牛乳を加える長野さんに、びつたりのコーヒーだと思う。

マグカップにドリップバッグを着けて、お湯を注ぐ。蒸らすためにアワーグラスをひつく

り返す。

お茶とコーヒーが混ざった香りが長野さんの方にも流れたのか、訝しむような視線が右から感じる。

「ラテ？」

「コーヒーですよ」

「この香りです？」

長野さんの視線が頬から手元に移ったようで、私は余計な詮索をされないように話題を変えらる。本来ならもつと前にするべきことをようやく。遅過ぎた質問。

「今、何時か分かります？」

長野さんは腕時計に視線を落としたのか、部屋の空気が丸くなる。

「七時一三……四分ね」

アワーグラスの中の砂は全て落ちていて、私は二回目のお湯を注ぐ。

「どうしてそんな朝早くに人の家に来るんですか？」



迷惑とまでは言わなかったけど、限りなくその思いに近い言葉を返すと、長野さんは私の言葉に隠されている思いを全て無視して答えてくれた。

「駅前のカフェがどこも混むから？」

「ここ、どこか分かります？」

「私が卒業する時にすごく泣いてた可愛い可愛い後輩のお家」

冗談を言う時に露骨に声の角が消える分かりやすい癖。この人のこういうところ、好きじゃない。思わず、私の声は低くなって、睨むように長野さんを見た。

「家ですよ。カフェじゃないんですよ」

長野さんは私の視線から逃げるように私の家のリビングをぐるりと見た。

「限りなく近いじゃない？ 美味しいコーヒーが飲めて、花もある」

「雰囲気の話をしてるんじゃないです」

私の口から溜息が零れて、流石に不味いと思った長野さんは素直に謝った。

「悪かったわよ」

謝罪の言葉も他の言葉と同じように、活き活きとして好きじゃない。

朝からこの人の声を聞くのはしんどいし、可能であれば休日に出会いたくない人なんだけど、この人には少なくともない恩がある。大学一年生という限られた時間の中で、美味しいコーヒーについて最初に教えてくれたのは、この人だった。

家で、朝、自分のためにコーヒーを淹れる時間を作れるようにする。そういうことを教えてくれたのは、この人だった。

その教えは、今でもこうして守っており、仕事とオフの日を明確に分けてくれるスイッチとして機能している。悔しいことだけど。

昔のことを思い出すと、さつさと出て行ってほしい、と言出しにくい。

普段だったら三回お湯を注ぐんだけど、長野さんの場合はそういうわけにはいかない。ドリップバッグを三角コーナーに捨てて、熱々のミルクを加えてかき混ぜる。

そうして、湯気の立つマグカップを長野さんの方へ差し出す。そもそもと前置きして、「私が寝てたらどうする気だったんですか？」

と訊けば、返答は明るい笑い声。

「休みの日の朝を大事にできないほど社会に染まっただけでしょ」

それからお礼を口にして、長野さんはマグカップを受け取る。私は溜め息をついて、使った器具を洗って片付ける。まだたっぷり残っている牛乳をどうしようかと一瞬考えたけど、冷蔵庫にしまおうしかなかった。

役目を終えたようにキッチンに背中を預けて、ブラックコーヒーを飲む。

この人のペースに巻き込まれたら、折角の貴重な休日が大変なことになる。そう頭では分かっていることだけど、隣に座る長野さんは、私のことを気にしないようにゆつくりと慎重に熱い飲み物を口に運ぼうとしている。

長野さんは猫舌だから、ホットを飲む時はいつも遅い。それなのに頼むものはいつも熱くしてほしい、と頼む。困った人。最初からアイスを頼めばいいのに。冷めるのを楽しんでる、というけどよく分からない。

秋風で冷えた手を温めるようにマグカップを持っている。ゆつくり、恐る恐る、舌先だけ

を水面につける。まだ熱かったらしく、マグカップをキッチンへ置く。

私達は不意に、示し合わせたように口を閉ざした。それまで賑やかだったキッチンの周りは静けさに包まれる。私が訊けることは沢山あつたし、長野さんが訊けることも沢山あつた。でも私達は不思議とコーヒーの香りに包まれた沈黙に耳を傾けていた。

長野さんが大学を卒業してからのことは、ほとんど知らない。就職活動はすぐに上手くいったけど、そこからのことは何も教えてくれなかった。私との関係は大学で終わつたような気がした。

私から訊かなかつたのは、人を好き勝手に振り回す歳上の人から解放された充足感の方が強くて、気づけば一年、二年と過ぎ去って、大学を卒業して、社会に出た。自然消滅と呼んでよかつたのかもしれない。自然消滅を避けるように荷造りや荷解きを頼んだら、長野さんは来てくれた。それ以来。

数年振りの再会で、私も長野さんも社会人として話せることはあつたかもしれないけど、私達はいまだに大学の先輩と後輩のままだった。

長野さんの腕に巻かれた腕時計が時を刻む音だけが、キッチンに響く。

駅前のカフェが混んでいるから、と長野さんは言っていたけど、駅前のカフェが混んでいるのは今日に始まったことではない。何かあって家に来た可能性が高いと思うけど、本当にコーヒーのために来た可能性も捨てきれない。コーヒーを好んで飲むのに行列に並ぶのが嫌いなこの人なら、後輩の家でコーヒーを飲む方を優先するだろう。

長野さんはコーヒーに手をつけず、綺麗になったキッチンを見ている。不意に口を開き、私を現実へと引き戻す。

「モーニングはないの？」

「うちはコーヒーだけなんですよ。朝は」

長野さんの視線が私の奥にある冷蔵庫に流れる。

「卵とか食パンは？」

「ありませんよ」

さつき冷蔵庫の中を確認した時には、卵もパンもなかった。あつたところで作らないけど。

「買いに行きましようか？」

他にも買ってきてほしい食材を伝えれば買ってきてくれそう声で提案される。

……でも、まだ朝の七時で、近所のスーパーはどこも閉まっついて、開いているのは精々コンビニや喫茶店やパン屋ぐらいだ。魅力的な提案だと思った自分が恥ずかしい。食パンと卵だったらコンビニで買えるけど、だったらそのまま長野さんを出勤させた方が良い。

私は奪われそうだった冷静さを取り戻し、突き放すように訊いてみる。

「そのまま帰ってください？」

長野さんは私の奥にある冷蔵庫を見たまま、意外な調子で訊いてくる。

「え、じゃ、ミルク、置いて帰っていいの？」

「え、持って帰るつもりだったんですか？」

「いや、プレゼントのつもりだったけど？」

「嫌いな物なんですけど？」

「嫌いな物を克服できるチャンスじゃない？」

「そんなプレゼントいりませんよ……」

嫌いなものを克服できるチャンスという言葉を反芻させ、私は訊く。

「今から駅前のカフェでも行きますか？」

少しの間があつて、長野さんが何かを願うように私の顔に視線を上げる。

「一緒に？」

「長野さんだけで、ですよ」

と一蹴すると、

「流石にこの短時間で二杯目は結構よ」

長野さんは眉を寄せ、少し冷えたと思われるマグカップを口元へ運ぶ。

こうやって話しているとコーヒーの飲み終えるまですつと居座られてしまいそうで、私は自分の分のコーヒーだけでも先に飲み切つて、改めて尋ねる。

「それで、一体本当は何の用なんですか？」

痺れを切らしたのが伝わったのか、長野さんはぐつと張つた目を少し細めて、私を見上げ

る。マグカップで口元を隠してみせるが、そんな素振りには似合わない。

どうしてそんなことを訊くの？ と言いたげな目に、私は続けてこう言う。

「私、今日、休みなんですよ。しかも有給なんですよ有給」

長野さんはマグカップを口元から離す。私を見上げる目は、私の発言が意外そうだったのか丸いもの変わる。そつと顔を寄せて気遣うように訊かれる。

「……もしかして有給取ったの、はじめて？」

牛乳とコーヒーが混ざった香りが、鼻先を掠める。お茶の香りも漂っていて、甘い。微かに眉を寄せて答える。

「去年も取りましたよ」

「安心したわ、取れる職場なのね」

長野さんは大袈裟にほつと息を吐いて、私の近くから離れるとローテーブルへと置いていたトートバッグから小さな箱を取り出す。

スツールに座ることなく、私へと歩んできて、差し出す。ラッピングがされて赤いリボン



で封された小さな箱。

「言ったでしょ、プレゼントよプレゼント。誕生日、おめでとう」

私は疲れたように大きく息を吐いて、驚くべきなかはどうするのか複雑な胸の内を隠すように笑う。

「誕生日なんてもう忘れてると思ってましたよ」

「あんだだけアピールされたらねえ……」

昔のことを思い出して露骨に顔を歪める長野さん。

私がこの人に誕生日をアピールしたのは誕生日の一ヶ月前からだったと思う。先輩なんだからプレゼントくださいよ、そんな高価な物じゃなくていいですから、ピアスとかで十分ですからって言うていたら本当にピアスを用意してくれた。二十歳の時は凄かった。

そこから社会人になった長野さんと大学生の私は疎遠になって、当然、誕生日プレゼントもない。去年もなかったし今年もないだろうと思っていたら、用意してくるのは卑怯だ。油断してる時に渡すなんてもつと卑怯だ。……自然消滅だと思っていたのは、私だけなのかも

しれない。私のことをかつてのように思っているのか訊けるチャンスだけど、答えを聞くのは怖い。

受け取る前に思わず言ってしまった。

「普通に渡しても良くないですか？」

長野さんは私の小言を気にする素振りを見せずに笑う。

「配慮よ配慮」

「何のですか」

「どうせ今日は友達にケーキ奢ってもらったりするんでしょ？」

「そうですけど？」

「だからよ」

何がだからなのか分からない。訊こうと思ったら、いらない？と手を引つ込まれそうになったので、受け取る。

リボンを解いて、封を開くと私に合いそうな、これから冬を迎えるのに浮かなさそうなマッ

トな赤い口紅が入っていた。この時期につければ、冬を先取りできそうな色合い。

この人は、切り替えさせるのが上手だ。仕事のオンオフは勿論のこと、季節の切り替えさせ方も。そうやって人のスイッチを勝手に切り替えさせるところは嫌いだっし、好きだった。

長野さんは腕時計をちらりと見て、コーヒーを飲み干した。

「ごちそうさま、美味しかったわ」

長野さんは空になったマグカップを私の方へ差し出す。本当に誕生日プレゼントを渡すためだけに来たらしい。

プレゼントを脇に置いて、マグカップを受け取ると、長野さんの手がそのまま私の指に触れ、手首へと伸び、優しく引き寄せられる。

私がか言うより先に、長野さんの顔が私の顔へと近づく。いけない近さであることを頭では分かっていたけど、どういうふうに断るべきか分からず、ただ長野さんの目を見ていた。怯えることもなく待っている私自身の姿を、長野さんの瞳の奥に見ながら。

こういうふうになんか近づく長野さんを見るのは今日がはじめてではなかったから。

唇に触れるだけの口づけは、ミルクとお茶の香りが混じって、甘さを覚える。普段嗅ぎ慣れない香り。長野さんだけの香り。

「今日はこれだけ」

囁かれ、続きを期待したように身体は硬直したけど、すぐに長野さんの顔は遠くなる。

そうするのが手っ取り早く、確実な答えであることを長野さんは分かっている。私が抱えていた全ての悩みや不安を消し去る。

ぼうつとしていている私を目覚めさせるように長野さんは確認してくる。

「来週末、空いてる？」

プレゼントとして貰った口紅とは全然違う赤さを頬に覚え、持ったままのマグカップを洗うため長野さんに背を向ける。

「……空いてますけど」

「それじゃ、また来週ね」

こういうところも好きじゃない。でも嫌いになれない。そうやって人を自分のペースに巻

き込むんだこの人は。そういうところに惹かれた自分が憎い。

マグカップを洗い、少しだけ落ち着いた私は長野さんの方を向いて言い返す。

「長野さんの誕生日でも何でもないですけど」

長野さんは荷物をまとめると、私の向こうにある冷蔵庫へと視線を投げた。

「賞味期限が来週なのよ」

どうせ飲まないでしょ、何か作りに来てあげるわ、と長野さんは明るい笑い声と共に高いヒールを鳴らして出て行く。

「まだ好きになれないでしょう？」

そんな言葉を最後に残して。

嫌いですという言葉は、確かな甘さを持って私の口の中に残っていた。〈了〉



# 木曜日の使い方

露天風呂には、宮内あきの姿しかない。湯船に浸かると、内風呂より少し熱かった。頭や肩を濡らす小雨が冷たく、心地良い。あきは露天風呂から辺り一面に広がる雨雲を見上げ、どうしてこんな日に、こんな時間にこんなところに足を運んだのか思い返す。

今はゴールデンウィークでもお盆休みでも年末年始でもない。六月の下旬、平日の木曜日であり、午前十一時。

あきはそのな時分に、温泉旅行に來ている。しかも、友達と二人で。会社の人間ではない女。

あきが働く会社の経理部は、あきを含めて五名しかないこともあり、有給を申請する時は、事前に一言話した上で申請されることが多い。良くない行為であることは全員理解しているが互いに被ることがなくスムーズに有給を取得できるようにそうなった。あきも度々、有給を申請していた。ただ年に二度あるかどうかという程度でほとんどの場合、他の社員の有給消化を優先している。部下が有給を取得しやすい環境を作るのも、あきの仕事の一つであったから。



あきは何も仕事が好きだとか、仕事にやりがいを見出しているとかいうわけではない。休みの使い方は、大学時代から続けている一人暮らしの時から得意ではなかった。正午を回る前には起きて、家事を全て終わらせると困ってしまう。残りの休みをどうしようか、と考えるてしまう。一時はアルバイトに精を出すことがあったが、そこまでして金を稼いだところで使う余裕がないことに気づかされ、ほどほどの仕事量に落ち着く。

昨年度の末頃に部長から、来年度のどこかで連続して三日の有給を消化してほしいと話された。最近決まった正社員の有休消化義務を、部長やあきから行えば部下達も一層有給を消化しやすいだろう、と部長は考えているようだ。尤もこの有給消化義務は年度の中で五日の有給を消化するものであり、三日連続で消化する必要はない。

あきは周りの方が良ければと遠回しに断ってみたのだが、同僚や部下達からは非休んでほしいと言われてしまった。いつ頃か良いかと部長に確認され、あきはいつでもいいです、と淡々と答えた。

決算の対応に追われる三月や新人研修に追われる四月に連続して三日の有給消化は取れな

いが、個人住民税に関する処理に追われる六月頃ならば何とかなるのではないかとあきを除く経理部メンバーで話し合われたようで、六月下旬の水曜日から金曜日か有給になった。

そんな五連休の日時を部長から通達されたのが、四月の頃。

降って湧いて出た五連休の使い道を、あきが悩んだのは言うまでもない。三連休でも最終日は暇を痛感してしまう人間に、五連休は長い。会社の仕事を持ち帰って連休の間にも仕事を片付けようと考えたが、個人情報がどこで漏れるか分からない危険性を考え断念した。加えて、あきに快適な連休を捧げようと経理部の面々はよく働いてくれた。よく働いてくれる部下に、休みの使い方に困っていると相談しづらい。

「考え事ばかりは良くないと思うわ」

内風呂へと続くドアが開いたかと思えば、湯気の向こうから、気遣うようで全然気遣う素振りが感じられない確認をされる。あきは無意識のうちに眉間に寄っていたしわをそのままにして、呆れたように声を上げる。

「誰のせいだと思ってるの？」

「私かな？」

露天風呂の水面が揺れ、この二日で見慣れた姿が明るい声と共に近づいてくる。均整の取れた色の白い身体。普段下ろしている髪は湯船に触れないようにまとめ上げられ、白い額が露になっている。

全然自分のせいと思っていない声音に、あきは訊く。

「本当にそう思ってる？」

近くにやってきた淡い顔立ちをした女は昨日から続いているゆるい声で答える。

「ワーカーホリック気味のあなたを救っただけ感謝して」

「別にワーカーホリックじゃないけど？」

「有給何日残ってるの？」

「残り十七」

「立派なワーカーホリックよ」

「まだ六月だからよ」

「去年も似たようなこと言ってなかった？」

「人の数字について考えることはできるのね」

「他の人の数字だからね」

あきは来年度に長い連休ができるかもしれないという話を、度々この女にしていた。フリーのイラストレーターとして活躍する柳田京子とは共通の知り合いの結婚披露宴で出会い、現在まで度々会う関係が続いている。

相談するとすぐさま、温泉旅行に行きましようという提案され、宿や交通手段などを決められた。旅行の食事は当日突然別のものが食べたくなるかもしれないので現地で適当に選ぶことになった。火曜日の仕事終わりに駅前で合流し、西から漂ってきそうな梅雨の気配から逃げないように東へと走る新幹線に乗り、三泊四日の温泉旅行がはじまった。

本来なら知り合いの結婚披露宴という場だけで終わるであろう縁が現在まで続いているのは、京子が数字に強い方ではなく、あきが数字に強いことが明らかになったためだった。

何年か前の三月に確定申告の相談をされ、あきも京子も大変な目に遭遇し、そこから少な

## 61 木曜日の使い方

からず月に一度は会う関係が続いている。あきが何かするのではなく、京子に経費の計算を  
確認させたり、領収書の整理をさせる程度。監督役としてあきがいる。京子が判断に困った  
時に、あきへと質問する。そんな関係。

何年か前の確定申告を終えた時、次からは税理士に丸投げすればいいのではないかと提案  
したが、それほどの上上はないと言われてから二人で定期的に確認することになっている。一  
年のことを数週間で終わらせるのではなく、一ヶ月のことを一ヶ月の終わりか月の初めにす  
るべきと京子に何度言ったか分からない。納期が決まっている仕事だと思えば、普段の仕事  
と変わらないでしょと心構えのアドバイスを送ったことはあるが、普段の仕事の納期はもつ  
とスパンが短いと返される。

そんなことを言いながら事務作業を見守る。休みが度々、京子のために費やされることを  
あきはあまり嫌だとは考えていない。普段行かないような飲食店に案内されたり、普段買わ  
ないような物が通販で送られたりする生活は、京子を手伝ったことによる分かりやすい達成  
感を与えてくれる。

そういう関係だと思つていたのだが、三泊四日の温泉旅行を一緒にするとは思わなかつた。この旅行も分かりやすい報酬の一つかもしれないと思つたが、既にその月はもう美味しいお取り寄せを通販で送られていた。

つまり、断ることもできたのだが、京子が容易に素早く次々と決めたので、あきは断る余裕がなかつた。ただ、行きの特急電車の中でも繰り返し訊いたことを再び口にする。それが精一杯、あきができる抵抗手段のように思えた。

「……暇じゃない？」

隣で羽を伸ばす京子は、しつかりとこの旅行を満喫しているように、暇を肯定してみせる。「旅行つて基本そうじゃない？」

「こう、もう少しあるじゃない。観光とか」

自分で言つてみて、随分と旅行の計画がみすばらしいものだったが、間違つていないだろう。駅前から宿に至るまでの景観は良かった。しかしその感動も驚きも、一昨日の夜と昨日の朝で味わい尽くしたような気がしてならない。バスやタクシーに乗つて更に足を伸ばせば

何かあるかもしれないが、この雨の中を動く気にはなれない。

「する？ 観光？」

京子は尋ねてくれるが、あきの乗り気ではない胸の内を読み切っているように、どうせしないと思うけど、という気持ちがありありと見て取れる。

「三日連続つてなると飽きるわね」

あきはそうまとめて、湯船から出た。後ろから昼は何を食べたいのかと尋ねられ、手軽に食べられて冷蔵庫に置いておけるパンやサンドイッチを希望した。昨日は定休日ですまっていた最寄りのカフェがテイクアウトもできることも伝えて。遠回しに、買ってきてほしいというのを伝えてみたのだが、京子からは意外そうな声が返ってきた。

「あった？ そんなカフェ」

あきは露天風呂の淵に腰を下ろし、足だけを湯につける。降りかかる雨が火照った身体を冷ましてくれる。

「あったわよ、通りに。ほら、小さなゲームセンターの前」

より具体的に教えてみるが、全然分かっていなさそうな自信に満ちた返事が返ってくる。

「ああ、あそこ。え、でも、テイクアウトなんかしてた？」

「してるわよ」

「いつ見たの？」

「火曜の夜。覚えてない？」

「……よく見てるわねえ」

京子は感慨深くを呟く。あきの呆れ返った視線に気づかないように。

あきは京子とそのカフェで酔い覚ましの珈琲か紅茶を飲みたいと言ったことを覚えている。何種類かのパンやサンドイッチもあれば、ランチメニューがあることも知っている。というか、京子が看板を片付けている従業員に聞いているのを覚えているだけだ。

火曜の夜にこの地に降り立った時、あきも京子も車内でビールを飲んだこともあって、少なからず平常とは違う感覚を味わっていたことは確かだ。ただあきはこの後に宿に行つて、チェックインをして、部屋に通されるということを覚えていたので程々にしていた。



が、京子は随分と楽しげで、今のような朗らかな調子に明るさが加わって、端的に言うところ、酔っ払って五月蠅い女になっていた。五月蠅いのは今に始まったことではないが、酔っ払うまでは考えてなかった。車内で二本目のビールを開けたところで止めた方が良かったのかもしれない。

京子とあきが会う時は、経費に関する書類や領収書や文書を扱うため共に白面である。その作業の終わりに頂く飲食も、京子はもてなす側という意識が働いているのか、酔って楽しげな様子は見て取れない。

京子はこの温泉旅行を楽しむにしており、あきを旅のお供にしたのは確定申告の前準備を手伝ってくれたお礼ではない。一人の友達として、この旅行を共にしている。

そう考えると嬉しい気持ちもあるのだが、それでもやはり三泊四日の旅行は長い。暇になってしまう。しかし、暇になってしまふのを恐れるように予定を詰めるとそれはそれで疲れる。暇になるか、疲れを覚えるか。どちらを選ぶかとなれば、あきは前者を採る。休みの日にまでわざわざ疲れたくない。京子もそのことは口には出さないが分かってきているようで、

あきが度々、暇を口にしても無理に予定を立てるようなことはしない。

ただそれでも、今日は一日中、暇である。それに、この地も梅雨入りしたらしく今夜も朝も雨のようだ。一昨日、昨日と泊まった部屋に籠るのは絶好の日なのかもしれない。

「そろそろ買いに行く？」

京子は湯船から出て、あきの脇を通り抜けようとする。その背中に、あきは確認する。

「雨の中を？」

京子の足が止まり、首だけを動かしてあきを外に出るよう促す理由を並べる。

「傘も履き物を借りられるし、仮に濡れたとしてもお風呂も入り放題だし問題なくない？」

あきは雨の日は出かけたくないタイプだったが、その理由を明らかにしたところで京子を説得するのは難しいように思え、別の理由を並べる。

「お風呂上がりはゆつくりしたいのよ」

あきは京子を追い越し風呂場を抜け、脱衣所に向かう。そっか、それじゃ仕方ないという

微笑は、少し遠いところから聞こえた。

手早くラフな格好に着替えると、長い髪をドライヤーで乾かす。追いかけるように脱衣所に来た京子の大きな声が脱衣所に響く。

「それじゃ、何か買ってきてあげて。ゆつくりしててちょうだい」

あきは髪を乾かす片手間に、すぐに希望を口にする。

「何かランチのセットがあればそれ。選べれるんだったら、美味しそうなやつでお願い。なかつたら、クロワッサンとサンドイッチ。飲み物はアイスコーヒーでよろしくね」

「そんだけ決まってる行きたくないのね」

「言ったでしょ、お風呂上がりはゆつくりしたいの」

そうしてあきは部屋へと戻り、京子は外へ出た。

※

雨は止むことはなく、曇天が空一杯に広がる。通りから少し離れたところにある宿の二階

の角部屋はいつまでも静かだ。十二畳の和室は二人で泊まるには十分。床間や窓際のスペースもあれば次の間も備え付けられている。雨が窓を叩く微かな音と柱に取り付けられた時計が進む音だけが流れ落ちる。

窓際のスペースからは広い中庭を見下ろせるのを、あきは少し気に入っている。今は緑の葉が雨に打たれるのを見るだけだが、桜や紅葉の時分になれば息を呑む景色が広がっていることだろう。

この旅行で分かったことはいくつもある。京子の朝は午前六時からはじまること、地方の朝刊を読むこと、必ず日に二回は運動の習慣として散歩に出ること、日付が変わる前には寝ること、普段はあまり喋らないこと、酒に弱いこと。

京子は暇を享受できるタイプであること。そういう京子といると、あきが暇の扱いが苦手なことを改めて確認できた。幸いなことがあるとすれば、京子があきのペースを乱さない人間であり、沈黙を苦としない人間だということだろう。

あきが分厚い小説を読んだりしていても、窓際の小さなスペースに出て変わり映えしない

景色を眺めたりしても、京子は何も言わない。

何も言わないからといってその間、京子が仕事をしているわけでもない。いつでもどこでも仕事ができるのを、あきは知っている。普段から仕事で使っているタブレットを起動したり、アナログでラフを考えたり、取材としてカメラを首から提げて出かけるようなこともない。ただ部屋で、時計の秒針の単調な動きに耳を傾けたり、香り高い畳の上で惰眠を食ったり、ぼんやりと外の景色を眺める。そんなふうにも二日を過ごしており、三日目もそんなつもりで過ごす気なかもしれない。

京子のそんな姿が、あきには暇に堪えられない人のように映り、仕事をしてもいいわよ気にしないから、と助け舟を出したら、心底意外そうな目を向けられ、どうして旅先で仕事をする必要があるのか、と言われた。フリーランスはいつでも仕事ができるからこそ、いつ休むかは自分でしつかりと決めないといけないらしい。この旅行は休むための旅行なのだから仕事はしない、と宣言された。

自己管理ができないとフリーランスではやっていけないというのを、あきは度々聞かされ

ていた。あきがその話をはじめて耳にした時、領収書の整理はできないのにと云ったが、それとこれとは話が違うらしい。京子の言う自己管理は体調面に関することだった。

そう言われると確かに京子は自己管理が上手いと思う。京子は職業柄、家で仕事を済ませることはほとんどだ。大雑把な部分は家でなくても何とかなるらしいのだが、本格的に仕事をするとなると、家の方が集中できるらしい。ただ家で仕事が多くなるとオンとオフの境界が曖昧になるようで困ると言っていた。

あきも最近は家で過ごすことが多かったが、オンとオフの境界が曖昧になるようなことはなく、よく分からない感覚だった。京子のようにエアロバイクを導入したり、一日のどこかにヨガを嗜んだりすることはないし、プロテインを飲むようなこともない。

あきは週に五日は会社に出勤しなければならない人間であり、そこそこに運動はできていると信じている。実際、体型が大きく変わったということはここ数年程度はない、この三日の間で脱衣所にある大きな鏡の前で度々体型を確認しても、無駄な肉が増えたことはない。

だから風呂上がりに窓際で雨音に耳を傾けながらアイスを齧っても全然問題ないのである。

京子から無事に店を見つけたことやランチのパンのセットが買えたメッセージが届き、少し早い昼食になるだろうと分かっていても。

アイスを半分ぐらい食べたところで、紙袋を持った京子が帰ってきた。京子が歩くと、コーヒーと小麦の香りが部屋に漂う。

「……本当にゆつくりしてるじゃない」

意外そうに呟く京子に、あきは当然といった調子で応じる。

「おかえり、だから言ったでしょ？」

「あ、ただいま。どっちで食べる？」

「あなたが来た方が早いわ」

あきは正面の空いている椅子を指さし、京子を促す。

部屋の真ん中に置いてある紫檀の机で買ってきた食事を摂ることもあれば、窓際の小さなスペースで机を挟んで食事を摂ることもある。二人で話し合っただけで決めたことではなく、朝が早い京子が寝ているあきを邪魔しないようにコーヒーや紅茶を窓際の小さなスペースまで運

び、クッキーなどの菓子を摘む。

あきは柔らかな香りの動きに鼻腔をくすぐられ、眠たい頭を無理に起こすことなく京子のカップからぬるくなつた飲み物を貰い、ゆつくりと頭を起こす。

「この旅行で分かったことがあるわ」

京子は持つていた紙袋を机に置くと、中からパンとサンドイッチとカップサラダとアイスコーヒーを取り出し、あきの方へ寄せる。あきは礼を口にしてから、アイスコーヒーにストローを挿し、京子の言葉を繰り返す。

「分かったこと？」

「あなたが思つたよりも怠惰つてこと」

「……そう？」

「うん。嫌いじゃないけどね。普段から数字のことばかり考えているから、もつとちゃんとしてるのかと思つた」

「家でもちゃんとしてたら大変じゃない？」



「それが、宮内の休日なんだね。良い切り替え方だと思う」

京子はオレンジジュースを飲んで楽しげに笑う。あきは何かを言おうとしたが、怠惰な休日を肯定してくれた京子に驚き、何も言えなかった。

京子が暇を享受するように、あきは怠惰を享受しているような気がした。一緒に旅をしている京子が思ったよりも動いてくれるからかもしれないが、あきは一日のほとんどもこの部屋で過ごしている。

怠惰を極めてみようかと昼前から酒を飲むことも考えたのだが、常日頃からそういう生活を送っていないかったため、旅先で急にそんなふうになる舞うことはできなかった。

あきにとつてこの旅行は、普段の休みから家事を抜き取っただけのようなものだった。

だからか目の前の女が普段と変わらない時間に起きたり、習慣としている運動を絶えず行ったりしながらも、確実に普段の日常とは違う楽しみ方をしているのが羨ましく思えた。

羨望の発見は、そのままあきの声と乗る。ただ、京子に悟られないように静かな調子を維持していたが。

あきは楽しいげな京子の顔を真正面から見つめて、

「私も、分かったことがあるわ」

と口火を切る。

「私のこと？」

「そう」

「当ててみてもいい？」

自信に満ちたように訊いてくる京子に、あきは煽るように口角を上げる。

「当たるかしら？」

「私が思ったよりも働くとか？」

京子は普段の習慣が癖になっているかのように、よく外に出た。何かを買いに行くこともあれば、食事のためにあきを連れ出すこともある。

確かに、この旅行で分かったことの一つなのだが、あきは少なからず当てられたのが気に食わず否定した。

「全然違うわ」

「嘘、え、私かなり外に出てるよ？」

「別に外に出てるのと働くのはイコールじゃないでしょ」

「まあ、そうだけど……。え、だったらなに？」

「ずっと楽しそうってだけよ」

二人しかないスペースに、不意な沈黙が落ちた。

あきはてつきり、旅行つてそんなもんじゃない、みたいな京子の自論が返ってくるそばかり思っていた。しかし、当の京子は沈黙を守り、じつとあきの顔を見ている。何かを言いたげなのを待っているようだった。

京子の視線を気にせずにアイスコーヒーをすすつたり、パンを齧ることもできたのだが、気になるとそのままにしておくことができない。

その瞳が嬉しそうに丸々と輝いていると、訊かないわけにはいかない。

あきは痺れを切らしたかのように、ひとまず一言だけ声をかける。

「……なに？」

あきの声を受けて京子の目元が、ふつと柔らかな微笑を描く。分からないのならばそのままでいい、そう言われているようだった。意外な反応に、あきは京子が楽しんでいると思っ  
ているのは自分だけの思い過ごしのように感じ取れ、すぐに言葉を並べる。

「なに、もしかして楽しくない？」

京子の答えは焦りがそのまま音になったかのように早口で、次第に落ち着きを取り戻す。

「いやいや、全然。すごく楽しい。ずっと楽しくて、幸せ。ただ……」

あきは再び訪れそうな沈黙を遠ざけるように、京子の最後の言葉を繰り返す。

「……ただ？」

「楽しい旅行だわ」

同じ言葉を繰り返して微笑する京子に、あきはこの旅行について考えを巡らせる。

楽しいか楽しくないという感情の話になると、あきは京子のように上手く答えられない。

旅行自体が好みではない節があるから。

もしこの旅の相手が京子でなければ、もしかすればあきは途中で帰っていたかもしれない。丁度良く放っておいてくれる京子の距離感が、心地良い。人の休日を怠惰だと言っても肯定してくれるのも有り難かった。

京子の優しい声が耳朶を打つ。

「一つ、提案があるんだけど」

考え事の妨げをした京子に、あきは柔らかく片眉を上げる。

「今日は随分と喋るじゃない？」

「静かにご飯を食べたいタイプじゃないでしょ？」

否定するようなことではなかったので、あきは京子の提案に耳を傾けることにした。

「それで提案って？」

「旅行から帰ったらさ、家に泊りに来ない？」

あきは短く、答えた。

「良い休日の使い方ね」

〈了〉



理由を答えよ

昼食の買い出しの帰りで久し振りに開けた家のポストには、家賃の請求書や電気代の請求書や広告の下に、一通の封筒が置いてあった。通販で何か買った覚えは最近ないし、酔っ払った時に衝動買ってしまった記憶も最近ないし、そんなメールも届いていない。もしかしたら知らない間に確認してしまったのかと不安に思ったけど他の郵便物と一緒に持った少し重たさを覚える封筒にはどこの通販会社の名前もない。

A4が折らずに入る封筒の真ん中に、黒いペンで私の名前と住所が細い文字で簡素に書かれている。裏を返すと、送り主の名前が同じような文字で書かれている。細い文字だけれど、払いや跳ねに大胆な動きが加えられた癖のある文字。

加賀奏からの郵便。随分と久し振りに見た名前と文字。様々な懐かしい感情に胸を打たれながら、何週間も前の消印から、いつの間にか年が明けていたことを知らされた。

エレベーターで自分の家へと向かいながら、加賀のことを思い返す。

私が彼女と知り合ったのは私がまだ高校で英語を教えていた頃で、確か前々職。新卒で他の職場で働いていたけれど、五月病が長引いたように憂鬱な気持ちが続いて、新卒で就職し



た会社は長続きしなかった。

大学の時にとりあえずで採った教員免許が功を奏して、私立高校に就職した。

加賀は私より前にその高校で働いており、国語の教師として教鞭を執っている年下の女だった。加賀は口数が多い方ではなかったが、だからといって話すことに遠慮を覚えるようなお淑やかなタイプでもなかった。言ってしまうえば、無駄話が好きではない人間であり、本人もそのことを自覚しているタイプ。他人と無駄に話すぐらいなら、本を読んでいたいと考えている人間。初めて話した時、お喋りは嫌いです、と言い切つて本を読み始めた仏頂面を、私は未だに容易に思い出せる。こんなに分かりやすく他人へ嫌悪感を示す年下の先輩がいることを、はじめて見たから。

そういう加賀は一人で過ごすことが多く、生徒からは怖いと思われる教師の一人であり、言葉を目より耳から得たいと思つている私との相性は当然良くなかった。愛想は良くした方が良いという私からのアドバイスに、媚びを売るのは得意じゃないんです、と答える彼女を私は不思議と嫌いになれなかった。

加賀は私が退職するまで、私のことをずっと好きではない人間にカテゴライズしていたと思うけど、私は加賀のことをそういうカテゴリーに分類することはなかった。遠慮なく、悪く言ってしまうえば非常識に近い無愛想さで会話を断ち切ろうとするふてぶてしい態度や、自分の好悪をはつきりと言い切る言葉選びや知性を、私は面白いと感じている。職を転々として、多くの大人や子供と接して、失業保険と退職金で休養を得ている今でも、加賀ほど面白い人間は稀な存在。加賀は自分に正直で、真面目なんだと思う。本人の口からは一度もそんな言葉聞いたことないけど。

家に帰って、何日か分の食材を冷蔵庫などにしまうと、電気代と家賃の支払い催促の葉書はタブレットの上に置いておいて、加賀から届いた郵便物を照明に照らし、中身を透かす。黒い四角い影は、手紙や葉書よりかは大きい。職場で何か私の忘れ物があつたのかもと考えてみたけど、忘れ物が加賀から送られてくるとは思えない。加賀が見つけたとしても、他の者に届けるように言うだけだろう。

封を切る前に私は改めて宛名や宛先と送り主を確認する。何度確認しても、私に宛てられ

た郵便であり、加賀から送られた物である。一人で本を読みたい、人と好んで話したくない加賀は、当然ながら人と連絡を必要以上に取ることはない。仕事の都合で連絡を取り合うかもしれないと言つて、連絡先を交換したことがあるが、加賀から着信が来たことは一度もない。私から金曜の夜というか日付が変わつて土曜の真夜中に覚えない着信を入れたことはあつても。月曜に加賀と顔を合わせても、土曜のことは何も言わないし雰囲気にも出さないし、私は日曜の段階で昨夜の自分の行動を理解して反省する。

そういうわけなので、加賀から何かが送られるということは考えられない。しかし私がどれだけ有り得ないと思つたところで、郵便物が嘘をつくはずがない。

困惑を断ち切るように、私は加賀から送られた郵便の封を切る。中には一冊の文庫本と二つ折りにされた一筆箋。一筆箋を開くと、お久しぶりですとかお元気ですかなどという挨拶はなく、

——百三十五頁から百三十八頁。

という一文が書かれているだけ。同封されている文庫本の頁数を指し示していることは分

かる。分かったところで謎が謎を呼んだことには変わりなく、なにこれ、という当然過ぎる独り言が、リビングに滑り落ちる。該当箇所を読めば、加賀がこんな郵便を送ってきた理由も分かるのだろうか。私は学校での加賀しか知らないが、オフでの加賀は意外にもこういうサプライズを好んでやるのかもしれない。と、一瞬考えてみたけれど、すぐに、あの加賀がそんなことをするわけがないと否定する。

よく分からない思いを抱えたまま、私は正解を求めるように加賀から送られた文庫本を読むことにした。文庫本のタイトルも作者も見ることがない。もしかしたら大学時代に見聞きしたことがあるかもしれない。

私は大学在学中にサークル活動とアルバイトに明け暮れた時がある。他にも、うっかり留年したり一週間ぐらい旅行したり、長い夏休みの期間全てを海外旅行に費やしたりした。そういう学生だったので、顔と名前が一致しない知り合いが多い。その知り合いから教えてもらった話の中に出てきたかもしれないと思ったが、本の名前も作者のことも出てこない。

加賀のことだから中身は言語に関する硬い論文だろうと考えていたら、本の中身は私の想

像を裏切るように、小説だった。短編集ではなく、一冊の長編小説。

小説を最初から読む前に、加賀が指定した頁を確認する。物語の節目になつているのでそこから読むこともできそうだったが、そこから読み始めると何が何だか分からなくなつてしまふので、最初から読むことにした。

読もうと思つた時、スマホが震え、一件の通知が飛んでくる。昼食と台所の掃除という予定は、今朝立てたもので、失業中に自堕落な生活を送らないように寝る前と朝起きた時に一日の予定を立て、リマインドしている。

昼食も台所の掃除も、読書の後に移し替えることは可能だ。でもそうすると、数時間後の私は、昼食だけ食べて、台所の掃除は明日に回してしまふだろう。そうして今日の夜か明日の朝に、達成できなかった一つのことを後悔してしまふような未来まで見える。

加賀から郵送された本は、台所の掃除の後に読むことにしよう。掃除を達成した後のご褒美のように。ただ、加賀に感謝するのはどこか好まないのです、この小説を書いてくれた作者に感謝することにした。

昼食を終えて、台所を綺麗にしてご機嫌だったので、珈琲を淹れて、私はようやく一息つくことにした。日はもう随分と高いところに昇っており、掃除の時から開けていた窓から健康やかな光と冷たい風が入ってくる。そつと窓を閉めて、私はようやく加賀から届いた本を最初から読み始めた。

物語は作者がドイツへ旅に出た時のエッセイに限りなく近い。

旅先で感じた異国と祖国と言語に関する物事が、一人称視点で描かれる。多くの異文化に触れたことによる自らの異物感、テキストに不安や心配という形で表現され続ける。母国語よりも不慣れな外国語を使い、旅を続ける作者は楽しいかもしれないが、時として痛々しく映る。味気ない、乾燥した冬の寝起きを思わせる気だるい文体は、はつきりと言えば私に合わない。加賀はそんなことを気にせず読むかもしれないけど。

自分で買った本なら、もう読むのはやめて、本棚にしまっているタイプの本。作者には申しわけないと思うけど、つまらない本を好き好んで読んでいられるほどの読書家ではない私は。

私は仕方なく頁をめくり、読み進める。

旅は続けられ、物語は作者の歩くペースに合わせるように時に立ち止まり、時に何かを確かめるように落ち着いた足取りになり、時に駆ける。

加賀が指定していた頁は、そんな作者が旅先で出会った日本人との出会いから始まる。久し振りに母国語で会話をすることにある種の安心と喜びを味わう。旅をすること、母国を遠くから見つめて改めて発見すること、日常の何気ないものを発見すること。そんな会話の応酬。作者の考えが綴られ、加賀の指定した頁は終わる。

旅はそこで終わることはなく続く。ドイツの旅を終えた作者は日本へと帰国し、再び旅人と再会する。物語の会話の中ではどこにも帰国したら会おうと約束した場面はなく、全くの偶然の産物。

作者はその旅人と旅の感想を話し、共感することもあれば反論することもある。そうして、作者の日常が何気ないものという極めて個人的な感覚で支えられていることを自覚したところで、物語は終わる。

ようやく本を閉じられた達成感に、私は珈琲に口をつける。もうぬるくなつて、苦味が目

立つ珈琲に変わっていた。高いところにあった日は傾き、茜色の光を辺りに振り撒いている。加賀がこんな本を突然送ってきた理由は、やはり分からない。読めば分かるかもしれないと思った自分が馬鹿みたいだ。

私は加賀のように、書かれた文章を読んで、書いた人間の心情とかを考えるのは得意ではない。直接、本人に訊いた方が早いと考えるタイプ。書き言葉は、私にとってしてみれば、きつかけの一つに過ぎない。

スマホの連絡先の中から、加賀の電話番号を探し出し、電話をかける。授業はもう終わっている頃だろう。呼び出しのコールが一回、二回、三回と続く。加賀がすぐに電話に出ないことは、前から知っている。四回、五回と呼び出し音が続き、留守番電話サービスへと繋がる。伝言を吹き込むことなく一度切り、またかける。

一度、二度と呼び出し音が続く。三度目に差し掛かろうとした時、

「何でしょうか？」

と、他人行儀を取り繕った、けれども言葉の節々にははつきりと不機嫌さを思わせる声が



割り込んできた。一時によく聞いた声。

「うわ、出た」

そんな早く出ると思ってたので、つい、率直な驚きが言葉になって、スマホを耳から離す。画面には、加賀と電話していることを示すアイコンや名前や通話時間が表示されている。離れた電話口から、少しの沈黙があつて、

「間違い電話でしたら切ってください」

と冷たく催促される。

加賀は私に本を送ったことを忘れていたような口振りだった。私が週末の真夜中に電話をしたことを覚えていない時のそれを思わせる態度。

加賀とこうして話すのはいつ以来だろうか。退職した時以来だから、色々と話すことはあるはずだ。加賀は省いたけれど、久し振りとか元氣だとか最近どうかかそういうふうな声をかけてもいい。でも、私と加賀の間にそういう典型的な挨拶はいつでもなかった。私が省くようになった。加賀はそういう挨拶よりも、何よりも先に会話という行為を終わらせたいた

イブだったから。

だから私の言葉は短いものになる。

「本、読んだわ」

加賀から返事は返つて来ず、電話が切られたような沈黙が落ちる。加賀との会話で沈黙を味わったことは何度もあるけど、今までで体験したことがない奇妙な沈黙だった。会話を終わらせるために意図的に口を閉ざす時とは違う、考えている時のそれ。

加賀は話すよりも沈黙で語ることがあるタイプで、他の人に話すと何を言っているか分からないだろうけれど、加賀は沈黙で喋るタイプだ。人が黙ると喋らなくなることを分かっている、加賀はよく口を閉ざす。ある程度沈黙が続くと、加賀の方から話を終わらせる。聞きたいことはもうない、と宣言するように。

だから加賀と話す時、私は自分が話す時よりも沈黙に耳を傾け、吟味する。その沈黙が何を語っているのかを。

今だつてそうだ。しかし何を考えることがあるのだろうか。やはり、加賀は私に本

を送ったのを覚えていなかったのだろうか。あるいはもしかすれば、私に送る予定ではなかった本が何かの手違いで私の元に届いてしまったのかもしれない。

「ここはあなたの日記帳ではありません」

長いようで短かった沈黙を破った加賀の言葉に重ねるように確認する。

「送ったでしょ？」

また沈黙が落ちたが、今度は慣れた沈黙だった。何を言っているのか、と問うような沈黙。はじめてこの沈黙を味わった時、何か自分が悪いような気をして会話を終わらせたことがある。加賀はそんなことを覚えているのか度々この手段を使う。久し振りに味わった苦い沈黙を破ったのは意外にも加賀の呆れ返った声。

「今は二月二十日です」

「それがどうかしたの？」

「送ったのは一月二十日頃だったと記憶してますが？」

封筒の消印を確認すると加賀の言った日付と近い。相変わらず細かいことまで覚えている

らしい。

「あなたは毎日郵便を見るタイプ？」

訊いても、返ってくるのは沈黙。会って話していたら、こちらの発言を疑うようにじっと見られているような、そんな沈黙。

加賀は帰った時に毎回ポストを確認するタイプらしいが、私はそんなに律儀じゃない。一時は毎日ポストを開けていたけれど、チラシばかりだと思っただけからは、頻度は減った。連絡の多くはスマホに来るし、郵便を送ったんですが、と言われてポストを確認することもある。そういうわけで送られた郵便の確認が遅くなるのは、加賀だからというわけではない。

私が黙っていると本を送られた謎は永遠に解かれない様子だったので、理由を話すように促す。

「それで、一体どうして本を？」

「読まれたんですね」

意外、という言葉が続きそうに続かず、私は素直な感想を返す。

「面白くなかったわ」

「だと思えます」

「加賀も？」

「私は面白いと思いました」

「どこが？」

「文章」

加賀が私より多くの本を、文章に触れている場面は過去に何度も見た。国語や日本語を教えるのに、英語の文章に触れている場面も見ることがある。どうしたのそれ、と訊いたら、教科書に掲載されている作品の作者を紹介された。アメリカで育ち、日本語でも小説を書く作者を。だから、英語で書かれた作品にも触れているらしい。

加賀が私よりも文章に明るいことは知っているが、あの文章の面白味を感じるのは難しくないだろうか。

どこに面白味を感じたのか説明されても分からないだろうし、加賀に説明を求める気もな

い。加賀に説明する気はないだろうし。ただ、加賀は面白いと思ったのだろうと思うだけで、深く掘り下げる気はない。私はそういう文章よりも、物語の面白さについて考えたいタイプだから。

ただわずかな可能性が胸に浮かんだので、口にする。

「面白かったから送ったってわけ？」

加賀がそういうことをしないと頭では分かっているのだけど、もしかしたらという可能性を考えると口角が上がる。可愛いところもあるじゃないかと思いつつ、いやいや加賀だぞと即座に思い直す。

即座に思ったことは正しかったようで、苛立ちを感じさせる不味い沈黙が私達の間を広がる。私はなるべく沈黙を感じさせなかったように、短い言葉で意図を問う。

「じゃ、何よ」

「大学入試で出題されたので」

「どこの？」

「共通テスト」

「いつ？」

「今年」

「これが？」

加賀に訊いたようで自分自身に確かめるような言葉。スマホを片手に、テーブルに置いたままのタブレットを起動して、調べる。

自分がさつきまで読んだ文章が、加賀が指定していた頁の文章が画面に表示される。旅人同士の出会いと別れが、味気ない文章で綴られ、文章の所々に傍線が引かれている。設問に目を通すと、傍線部が表現していることに近いものはどれか選びなさい、と書かれている。自然と生まれた沈黙を破ったのは、私の困ったような溜め息だった。私は問題を作った側でもないし問題を解く側でもないのです、この出題について多く考えることはないだろう。しかも、国語の問題であり、かつて教鞭を執っていた英語ではない。問題の難易度とか出題意図とかそういうことを考える気はない。

何に困ったかと言えば、こういうことを知らせた加賀に向けた溜め息。でも、加賀は我関せずといった様子で黙っている。

共通テストが終わった頃に加賀が出題された問題のテキストに目を通すのを、私は毎年見ている。どうして読むのかと尋ねると、テキストの一部にだけ目を通して分かった気になりたくない、と珍しく強い語気で語られて驚いた。だからといって加賀からそのテキストや作品について話を振られることはない。

加賀にとつてしてみれば、共通テストに出てきた作品を読むということは、翌月にあるバレンタインデーに向けて新作のチョコを買う時と変わらない感覚なのかもしれない。私はそんな感覚なのだろうと思っている。本人に訊いたことはないけど。

ただ私に本を送ったことは分からない。私と加賀の共通点はいくつかあるし、この本の作者と私も関係はある。あるんだけど、加賀がそういうことをするタイプじゃないことは同じ職場で顔を合わせて知っているはずだ。

「だから？」



送った理由を明らかにしてもらおうと訊いたら、同じ言葉を返される。

「だから？」

「大学共通テストで使われたから私に送ったの？」

「はい」

素直に頷かれ、私は更に驚きを包み隠さず問いを重ねた。

「一体急にどうしたの？」

沈黙が落ちたが、加賀を相手にしている時に感じるには珍しい沈黙。普通、多くの人がする考える時に口を閉ざした時に生じるあの沈黙。

まさか悩まれるとは思わなかった。いや、悩むか。私が加賀にプレゼントを送ったとして、同じように訊かれても、きっと答えに悩む。

プレゼントされた中身については理解できた。まだ理解できないでいるのは、もう片方。つまり、急にどうしたのか、ということ。

私も加賀もプレゼントを送り合うような仲ではないし、突然に送り合う関係でもない。で

も現実の私と加賀は、加賀から突然プレゼントをされた。

加賀は、答える。

「思い出しましたので」

何をとか、誰をととか、どうしてとかそういう言葉は補われなかった。ただ、それだけ。極めて個人的な感覚。

加賀らしいな、と思った。

長年の時を経た再会に、久し振りも元気だった？ もなかった私達らしい感覚。突然、いきなり本題に入る遠慮のなさ。会話の途中で当たり前のように沈黙を作り、当たり前のように会話を断ち切る。

正解か不正解かを言い渡されるのを待つ加賀の沈黙に、私も個人的な感覚で答える。

「良いと思うわ、それで」

電話口の向こうで綻んだ沈黙。

加賀がその本を読んだ時、私の他に何人もの顔が浮かんだことだろう。その中から私が選

ばれた。どうしてかはきつと加賀自身も分からないだろう。ただ、そうするのが当然のように、一筆執つて、本と共に送つた。

私との共通点を思い返せば、いくつかある。あるけど、それはきつと、この本を送つた時の加賀の思いと同じではない。同じ職場だった、同性だった、デスクが隣だった、他の教師達よりよく話した、電話をよくかけてきた、外国語を教えている……。

加賀が作品から私を思い返したことは、良いと思う。

良いと思うから聞きたいことは多くなるし、話したいことも多くなる。電話越しでは分からないことが多い。加賀の場合は特に。

電話を切るには最適なタイミングだったけど、私と加賀の電話はまだ切られていなかった。不思議なことに。

懐かしさを噛み締める加賀に、私は訊く。

「今夜、暇？」

「最低ですね」

侮蔑の言葉を聞こえない振りをして、私は淡々と約束を取り付ける。加賀の最寄り駅を口にして、二十時と続ける。

「それじゃ、また後で」

と言つて、私は電話を切つた。

加賀が来ないかもしれない可能性は十二分にある。普段から誘いは断るタイプだったし。

でも今日は、行きませんと言わなかつた。行きませんと言われても、今夜はきつと来るだろうという自信があつたけど。

私が話したいことが多くあるように、加賀にも話したいことが多くあるだろうと思う。この本を送つた理由とか。

私は鼻歌を歌いながら出掛ける準備をすることにした。

加賀は本から答えを求めるタイプかもしれないけど、私は直接聞くに行くタイプだ。〈了〉



## 後書き

この度は本書をお手に取っていただき、まことにありがとうございます。本書は同人誌即売会で新刊として頒布した短編集ではありません。日頃から書き溜めた短編を収録した作品集となっております。全て既にウェブで掲載してました作品ですが、誤字脱字の修正等々をしております。

おそらく、この作品集に目を通された方は、同人誌即売会で新刊として頒布してもいいのでは？と思われるかもしれません。疑問を懐かれた方に向けて、同人誌即売会で新刊として頒布しなかった意図などを含めて色々と書きますので、長くなるかと思いますがお付き合いいただければ幸いです。

まずここに収録しました短編は、全てある目的の元で書きました。普段は新人賞に向けて小説を書いているのですが、どうも肩肘の張った小説になることがあり、肩肘を張っていない気軽な読み書きできる小説を書いて、普段という小説を書いているのか感覚を取り戻そう

という動機で書かれたのが「エチュードを弾くために」であり、「残り430ml」でした。毛色の違う二作品でしたがいずれも社会人を主役にした女性同士の関係を描いた作品ということもありましたので、後一つ二つ書けば、肩肘の張らない社会人百合を集めた作品集になるのではないかと考えて書かれたのが残りの二作品となっております。

同人誌即売会にサークル参加せずに新刊として頒布することを考えずに、こうして紙媒体として頒布したのは二つの理由があるからです。一つは同人誌即売会にサークル参加をしなくても、同人誌を作っているのではないかとということ。同人誌即売会にサークル一般問わず参加するのは楽しいです。楽しいですが、その楽しさを得るまでにサークル参加の場合、新刊を用意して等々の、少なからずのしんどさを体験します。時として会場に足を運び、はじめましての方と交流するのにしんどさを覚えることもあります。そういう心苦しさが続きますと、そこまでして同人誌即売会に参加する意味であるのかな、紙媒体の同人誌を出す方法で即売会にサークル参加するしかないのかなと考えるようになりました。紙媒体の本を自家通販で読者の元に届けてもいいのではないかと、という結論に至り、この紙媒体の作品集

が生まれました。

一つは個人サイトに掲載している小説は十年も経たずに読めなくなってしまうのではないかといいことです。去年の六月頃から、バックアップも兼ねて個人サイトを立ち上げ、自分の書いた作品を掲載しております。レンタルサーバーを使用し、定期的に小説の更新を続けております。バックアップも兼ねてという表現を使いました通り、過去に書いた小説や同人誌をアップロードしております。昔のデータを昔使っていたパソコンから取り出してアップロードして、という作業を一時期繰り返しました。そんな時、ここに掲載されている作品は十年後には読めなくなっているのではないかと考えるようになりました。文体が古くなつてしまい、読めなくなってしまうということではなく、物理的に読めなくなってしまうているのではないかといいことです。レンタルサーバーのサービス停止とかいう理由で。ある事柄や事象を検索して、結果のページを確認しようとした時、リンク切れや記事が削除されていることがあります。僕の書いた小説も、十年後と言わずに五年後や来年にも、そうなるのではないかと危惧します。記録として保持し続ける難しさを痛感した、と言えるかもしれ



ません。

紙媒体として一冊の本にしてしまえば、そういうインターネットを通じて生じる記録の難しさから解放されるのではないか、読者の方々の手元に紙媒体の書籍があれば、記録が保持されるものではないかと思ひ、紙媒体として残すことにしました。

そんな二つの理由で、この本は紙媒体になり、読者の方の元に届けようと作りました。

一次創作同人誌としては二冊目の作品集です。一冊目の少年とお姉さんの恋模様を描いた作品集とは全然違う作品集になっております。楽しんでいただけましたら幸いです。

三作目の作品集を出すかどうかは現状では未定です。また何作か書き、作品集になりましたら紙媒体にまとめ自家通販をするかもしれません。その時になりましたら、この本と同じように手に取っていただけましたらこの上なく幸せでございます。

二〇二三年四月下旬 近藤貴弥

しゃかいじん ゆり たんべんしゅう  
社会人百合短編集

---

2023年5月22日 初版

印刷 ちよ古つ都製本工房

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ  
近藤貴弥 (出藍文庫)

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

個人サイト <https://strn2014.com/>

ロゴデザイン 工藤雅弘

この小説はフィクションです。

実在の人物や団体等と関係ありません。

※本書の無断転載・複製・販売等を禁じます。

---